

子どもの自立を育む音楽科の支援

—第3学年「どきん—〇〇編—」の実践—

福田 秀 範

1 音楽における子どもの自立とは

音楽において子どもの自立をどうとらえればよいだろうか。私は音楽における自立に向かう子ども像を「自分の思いを音で表現しようとする子ども」と捉えた。つまり、自分が出会った曲を、自分の精一杯の思いを込めて表現しようとする子どものことを意味している。「自分の思い」とは曲の持ついろいろな要素（歌詞の内容、旋律の雰囲気など）から総合的に捉えた自分なりのイメージで、これを表現するにはどのように工夫したらよいかを試行錯誤しながら、ついには自分なりの表現を見出していく姿こそが本当の意味の自立と見る。

では、どのように支援していけば、自分の思いを音で表現する子どもを育ていけるであろうか。ここでは、指導事例「どきん—〇〇編—」の実践を通して、その支援のあり方を探っていきたい。

2 研究の計画

(1) 研究仮説

歌詞の内容を、自分の体験に置き換えてとらえられるような支援をしていけば、歌詞に描かれている場面の様子や登場人物の気持ちを思い浮かべながら生き生きと歌うであろう。

(2) 具体的方策と支援活動

- ①歌詞の内容を読みとる時間を確保する。
- ②歌詞の中から、子どもの体験に迫ることのできる言葉を精選し発問の計画を立てる。
- ③自分なりの表現を徹底的に追究していく場と時間の保証をしていく。
- ④自分や他の表現を聴き合い、自分の表現を振り返る場と時間を保証していく。

3 実践の概要「どきん—〇〇編—」（第3学年）

(1) 題材について

本題材で扱う「どきん」（谷川俊太郎作）は得体の知れないものに対し、興味津々に触ったり押ししたりしながらその感触を楽しみ、胸をときめかせている子どもの様子を巧みな擬態語を使って表現し、最後に「だれかがふりむいた！ どきん」という強烈な緊張感と余韻を残し締めくくっている詩である。この詩の主人公の抱いた気持ちは、何事にも興味旺盛な中学年の子どもたちにとって、自分の体験に置き換えてとらえることができやすい。また詩である「どきん」を歌として楽しめるように、詩の持つ自然な語感、いわゆる言葉の抑揚やシンコペーションを手がかりにして、詩の言葉から音高やリズムを感じとり、教師と子どもたちの手で自分たちのオリジナルの旋律をつくることにより、つくって歌う楽しみも味わうことができる。

(2) 指導目標

- ①歌詞の内容を思い浮かべて、生き生きと歌うことができるようにする。
- ②詩から感じとったリズムや音高を生かして、簡単な歌づくりを楽しむことができるようにする。

(3) 指導内容と計画（全8時間）

第一次	詩のリズムに音をつけたら—「どきん」のふしづくり—	4時間
第二次	「どきん—〇〇編—」を歌おう	3時間
第三次	3年生合同「どきん」の発表会をしよう	1時間

(4) 学習活動と具体的な支援の方法

〔 〕内は使った資料や言葉かけの具体例

	学習活動	めざす子どもの姿	具体的な支援の方法
第一次 (詩のリズムに音をつけたら)	<p>「わたしと小鳥とすずと」(歌)を鑑賞する。</p> <p>「かえるのびよんた」の歌と歌詞の関係を調べる。</p> <p>即興でふしづくりをして遊ぶ。</p> <p>「どきん」のふしをみんなでつくる。</p>	<p>○ どきんのふしづくりに興味・関心を持ち今後の活動に期待感を高めている。</p> <p>○ 初めてのふしづくりに対する不安が取り除かれて、自信を持って取り組んでいる。</p> <p>○ 子ども一人ひとりが自分の思いを出し合ってふしづくりに取り組んでいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「どきん」と平行して国語で学習した「わたしと小鳥とすずと」が既に歌として録音されているものを鑑賞する場を設定する。 <p>〔 〕 「今からみんなにある曲を聴いてもらいます。初めて聴くと思うけど、実はみんなのよく知っている歌だよ。」</p> <ul style="list-style-type: none"> 「かえるのびよんた」が歌詞の言葉の抑揚と音程が似ていることを図示する。 <p>びよん ご かえるの た す い な</p> <ul style="list-style-type: none"> 短い詩を使って、即興でふしづくり問答をして遊ぶ時間を設定する。(教師と子ども、子ども同志) 「どきん」の最初の一行をみんなでふしをつけて歌う体験の場を設定する。 子どもの実態を考慮し、ふしづくりに要する時間や子どもの活動が負担にならないように、活動内容を精選する。 <p>◇ 8つのグループで1行ずつ、分担してつくる ◇ 最初と最後の2行は教師がつくる ◇ 擬態語のところはつくらなくてもよい</p>
第二次 (「どきん」〇〇編)	<p>みんなでつくった「どきん」の歌を聴く。</p> <p>詩のイメージに合う歌い方を工夫して歌う。</p>	<p>○ 自分たちでつくった「どきん」の歌を聴き、できた喜びを味わっている。</p> <p>○ 詩から感じとったイメージを自分なりに表現しようとしている。</p> <p>○ 歌い方の工夫の仕方がわかり、意欲的積極的に、自分なりの歌い方を追求している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの意見を取り上げながら、旋律の動きや和音進行、前奏、音色のなどを工夫して歌を教師が仕上げ、範唱・範奏する。 「どきん」に描かれている得体の知れないものを「〇〇」と仮定して、クラスの共通理解を図り、クラスみんなで「〇〇」をイメージして歌の表現をしていくように提案する。 「〇〇」を触るとどんな感じか、その感じを伝えるにはどのように歌えばよいか、などを言葉かけにより具体化していく。 歌い方を工夫する部分を「つるつる」などの擬態語を中心にし、その歌い方を聴き合う場を設け、自分なりの表現が深まっていけるようにする。
第三次 (発表会)	<p>自分たちや他のクラスの「どきん」の歌を聴き合う。</p> <p>「どきん」の学習のまとめをする。</p>	<p>○ 自分たちや他のクラスの「どきん」を聴き比べながら、お互いのよさに気づいている。</p> <p>○ 本時の学習で学んだことを振り返り、今後の表現に生かそうとしている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> どのクラスの「どきん」も和音進行、リズムは同じで、旋律の動きと擬態語の歌い方や言葉が、クラス独自になるようにふしをつくることにより、他のクラスとのちがいを子どもたち自身で見つけやすくしておく。 本学習のふりかえりの場を設定し、これからやってみようことなどの記述を参考に、学習計画を改善していく。

(5) 授業の実際

①第一次より

「わたしと小鳥とすずと」(金子みすゞ作詞 田嶋勉作曲)の鑑賞は、子どもたちの反応が鋭く、すぐに曲名が分かった子どもがほとんどであった。国語の授業で十分に読み深めているらしく、みんな、教科書もないのにこの詩を朗読しはじめた。「へー、あの詩が歌になってるんだ。」と驚きの声を上げる子、曲に合わせて口ずさんで歌っている子など子どもたちのこの曲に寄せる関心は高かった。ここで次のような提案を子どもたちに行った。

T「さわってみようかな」(「どきん」の冒頭を読む。)

C「つるつる」(この詩も暗唱しているらしく、即座に反応が返ってくる)

T「おや、よく知ってるね。今の詩は？」 C「どきん」

T「このどきんも歌にできないかなあ。」

C「できるかなあ・・・むつかしそう。」

T「よし、みんなで最初のところを何回も読んでみよう。」

C「さわってみようかな。さわってみようかな。……。」

(何回も繰り返している途中から教師がピアノで伴奏を加える。)

T「なんだかこんな歌に聞こえてきたぞ。この伴奏で歌ってみて。」

C「さわってみようかな(ミソーソミラーミフッ)」 T「できた。」

C「本当だ。」「できた。」「おー。」

こうして、「どきん」の最初の旋律ができあがった。途中で教師の弾いた和音伴奏は、言葉の抑揚やイントネーションをもとに、あらかじめ旋律の動きや和音進行を予想してつくっておいたものに、子どもの読みを聴きながら即興を交えて提示した。続きのふしづくりは学級の8つのグループが1行ずつ行った。「かえるのびよんた」の出だしの歌詞を例に言葉の抑揚を思い思いに感じとったものを紙に書いていき、模造紙2枚分の旋律の動きだけ書かれた楽譜が仕上がった。(資料①)

この楽譜を参考に、教師が音を付けていった。最初の1行の歌の雰囲気を生かし、和音の進行を試行錯誤しながらシンセサイザーに打ち込む作業を行った。こうして曲が出来上がった。(資料②)

わって よう なあ さ み か	い ん ね りよく かんじる え
て よ し み う なあ お か	は わって ち う ま るう きゅ
すこ も し そり なあ お か	せもふ か い よお てる
そ かあ い ど う もち お	じめ る き る あ は かあ
お ちやっ よ た	だ む きん れ りい
れ た なあ	かがふ た!ど

「どきん」の詩の言葉に抑揚を付けて表記した楽譜 (資料①)

どきん-00編-

谷川俊太郎 作詞
3-104412
福田尚苑 作曲

さ わ て み ゃ か ん () か し て み ゃ か ん ()
 も し そ り なあ () も う ど お う ん ()
 た れ ん た よ () え へ へ い ん り く
 ん じ る ん え () ち ゃ う は ま わ て る う
 () か せ も ふ い て る () あ る き は じ る
 ん () だ む きん () だ む きん ()

出来上がった楽譜 (資料②)

②第二次より

出来上がった曲を聴いたときの感想は上々だった。1回目は耳をじっと曲に傾け、どんな曲になったかを審査しているかのようだったが、2回目以降は何度も「アンコール」の連発であった。前奏、最後の「どきん」というところのスリル感が子どもの心に留まったようである。子どもはあっという間にこの歌を覚えてしまった。自分たちのつくった旋律の動きをもとに、時折「なんか曲の動きが変だ。」というつぶやきも聞こえたが、これはこれでおもしろいということでみんな楽しんで歌うことができた。でも、何かが足りないことは子どもたちにも明らかなことだった。「つるつる」などの擬態語のところが手つかずであるからだ。子どもたちは「つるつるも歌にしたい。」といい始める。そこで次のような提案を行った。

T「このつるつるしたものは何だろうね？」

C「お坊さんの頭」「大きな石」「爆弾」……

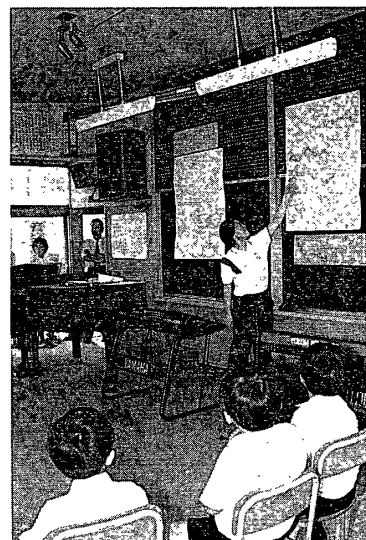
(いろいろ意見が出たが最終的に多数決で「爆弾」に決まった。)

T「よし、ではこのクラスの歌は「どきん」爆弾編で歌ってみよう。」

それから「爆弾をこれから触るとなると、どんな歌い方になるかな、その爆弾はどんな大きさかな、どんな形をしているのかな、重いかな」等、子どもの爆弾についてのイメージが深まるようにいろいろな言葉かけを用意し、子どもと問答をくり返して子どもと歌っていった。擬態語の言葉も爆弾というイメージに合わせて「どっかんどっかーん」など原作にないものも創作され(資料③)、子どもたちは楽しんで歌った。

さわってみようかなあ	つ つ る る	いんりょくかんじるねえ	し み み し
おしてみようかなあ	ろ ろ こ こ	ちきゅうはまわってるう	ぐ ぐ い い
もすこしおそうかなあ	ご ご ろ ろ	かぜもふいてるよお	よ そ そ よ
もいちどおそうかなあ	ろん ろん ご ご	あるきはじめるかなあ	た た ひ ひ
たおれちゃったよなあ	どっかー か どっん ん	だれかがふりむいた	き ど ん

児童の創作した言葉とその抑揚(資料③)



③第三次より

自分たちの歌がある程度歌えるようになると、だれかに聴いてほしいという願いが出始めた。報道委員会の給食時の放送の中で、全校にビデオ放映してもらえることになり、そのためのビデオ制作にとりかかり始めた。自己満足で歌っていた時とちがいで、全校の人に聴いてもらうというめあてとうれしさもあり、歌も楽しさの中にも真剣さがただよっていた。また、他学級の曲も気になるら

しく、どんな曲かを聴きたがる子どもが増えた。「じゃあ、ちょっとだけ内緒で」とシンセサイザーの伴奏と旋律を聴かせる時間をとった。「ぼくらのと似とるけど、なんか違う。」「引力かんじるねえのところが動きが違う。」様々な感想を口々にしていた。3年生合同での発表会は時間設定が困難だったので、給食放送がその役割を担うこととなった。それから約一カ月後、終業式で学年でがんばったことを全校に発表する場で、この「どきん」の合同発表会は実現した。

(6) 授業終了後の子どもたちの反応 (振り返りカードより 男子19名 女子20名 全39名)

1 この学習は楽しかったですか

とても楽しかった	34名
楽しかった	2名
ふつう	3名
あまり楽しくなかった	0名
全然楽しくなかった	0名

2 この学習を自分はがんばったと思いますか

とてもがんばった	27名
がんばった	5名
ふつう	4名
少し遊んだ	3名
がんばっていないかった	0名

理由 (とても楽しかった, 楽しかった)

- 初めて聴いたとき。メロディーが楽しかった。
- 「たおれちゃったよなあ」というメロディーが楽しかった
- みんなで一緒に、世界に一つしかない曲がくれたから
- おもしろい音楽がくれたから
- みんなでにこにこしながら楽しく歌えたから
- 「どっかーん」などが入って、歌が盛り上がったこと

理由 (ふつう)

- 男子に遊んでいる人がいたから

3 今度やってみたいことに○をしましょう。(複数回答)

自分の好きな詩を歌にしてみたい	11名
歌詞の言葉の意味を考えて歌いたい	2名
クラスみんなで考えた詩を歌にしてみたい	27名
その他	9名

その他の内容

- 先生と歌のおいかげっこ
- 歌をおどりにしたり劇にしたりしたい
- 本を歌にしたい
- ダンスしたい
- 楽器で伴奏したい
- 好きな歌をたくさん歌いたい

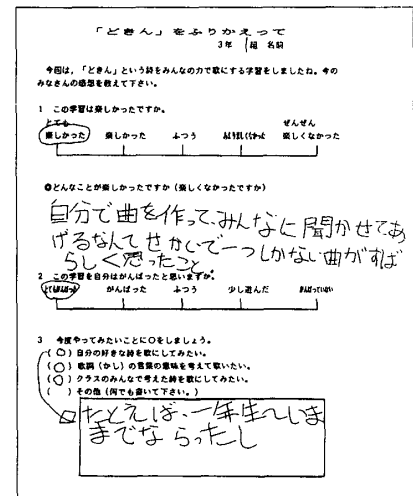
4 考 察

本節では、児童の学習活動の実際および授業後の振り返りの記述内容の分析を通して、研究仮説の検証を行う。

歌詞の内容を、自分の体験に置き換えてとらえられるような支援をしていけば、歌詞に描かれている場面の様子や登場人物の気持ちを思い浮かべながら歌うであろう。

(1) 歌詞の内容を、自分の体験に置き換えてとらえられるような支援になっていたか

今回の授業で上記に関わる具体的な支援は、「どきん」に出てくる得体の知れないものを「爆弾」という共通のイメージに限定したことである。そうすることで、爆弾を触ろうとする時の、ハラハラドキドキする感じを一人一人がその人物になりきり表現しやすくなると想定して授業を行った。しかし、授業者の思いが出すぎ「爆弾は大きく、重く、恐ろしいもの」という固定観念で子どもにイメージをとらえさせようとしていた。実際の子どもの反応は、爆弾なんて平気と感ずる子、小さ



な爆弾をイメージした子など、当然のことながら様々であった。ここで、「これがその爆弾だ」という具体物を提示してみると共通意識ができたかもしれないが、一人一人がイメージした爆弾のもとにその後の展開を見守ることにした。「さわってごらん」という発問で、大きな爆弾を触ろうとしている子どもは、手のひらで大きな動きで触る動作を、小さな爆弾を触ろうとする子は指先でつんつんとするような動作が見られた。また「今その爆弾はどこに置いてあるのかな」という発問により、いすから離れて触りに行ったり、「さわってみてどうだった」という発問に対し「つるつる」という同じ言葉が一斉に返ってくると、間髪入れずに「今だれに言ったの、独り言？友だち？」「その友だちはどこにいるの、すぐそば？少し離れたところ？」「じゃあ、どんな声の大きさでつるつるって伝えようか」と子どもと問答をくり返し、子どものイメージがより具体になるようにしていた。これにより、子ども一人一人が自分なりに声の出し方や大きさ、動作を工夫しながら歌うことができた。ただ、全員が一斉に歌うことが念頭にあり、一つの歌い方にまとめようという授業者の意図から、ここで表れた一人一人の創造的な表現全てを生かし切れなかったのが残念である。「爆弾」という共通のイメージに限定したことは、授業者にとっては、一斉に子どものイメージを具体へ導いていく言葉かけを構成する上で有効であり、爆弾を触ったことのないであろう子どもたちに本当の体験のように置き換えることができたように思われる。しかし、子どもにとっては「爆弾」であろうと他の物であろうと、自分なりにイメージを持つことは可能で、授業者側に子ども一人一人のイメージに対応していける用意があれば、むしろその方が個性的に子どもの思いを引き出すことができると思われる。

(2) 歌詞に描かれている場面の様子や登場人物の気持ちを思い浮かべながら歌うことができたか

上記に関わる支援として、「どきん」の曲づくりの際に擬態語のところの旋律をあえて創作せずに、即興で子どもが表現するように構成したことがあげられる。また、「爆弾」という共通イメージから、それに合わせて擬態語を自由に変更してもよいという提案も行った。こうして出来上がったのが「どきんー爆弾編ー」で子どもたちはこの歌をとっても楽しんで歌うことができた。しかし、子どもの振り返りカードなどから分析すると、楽しく歌えたのは①自分たちでつくった世界に1つの曲である②メロデーがおもしろい、が大きな理由といえる。歌詞の意味を考え、「つるつる」をどのように歌ったら、触ったときの気持ちが相手に伝わるかをいろいろ歌ったことは、子どもの楽しかった理由としてはあがってきていない。本題材では、歌い方を工夫する活動というよりも、みんなで「どきん」の旋律や言葉をつくる活動の方がウェイトを占め、子どもたちの関心・意欲も高かったようである。それにも関わらず、今回の授業で子どもたちの表情豊かな歌が引き出したのは、これまでに述べた支援の影響というよりは、「どきん」という子どもに親しみのある詩を歌として子どもたちに提供しようとした授業者の思いが最大の支援であったかもしれない。

5 成果と課題

今回扱った題材「どきん」は国語科で学習し、深い読みとりも既にできている段階での授業となった。しかも、曲は子どもたちと教師の手によるオリジナルであった。このことは、これまでに子どもたちが経験したことのないことづくしで、子どもの興味・関心・意欲も余計に増したものと思われる。この詩に対する深い読みとりがあったからこそ子どものいろいろな表現を引き出すことが可能になった。今後は子どもたちが新しい曲と出会っていく中で、歌詞の内容を深く読みとる時間をいかに設定していくかが重要な課題になってくるであろう。また、「どきん」同様、国語科に限らず他教科に曲になりそうな題材を追求していくことも、子どもの興味・関心・意欲を高め、音楽表現を広げていく上で興味深い学習内容になっていくものと推測される。(すでに「モノドラマ合唱」という分野で山本文茂は国語教材のいくつかを楽譜化しており、それを題材にした実践報告もなされている。このことについては初等教育70号にて詳しく述べたい。)

(本校教員)